

## 書評：若林悠『日本気象行政史の研究——天気予報における官僚制と社会』 東京大学出版会，2019年

川 端 美 季

(立命館大学衣笠総合研究機構)

2019年度の夏、「生存をめぐる制度編成研究プロジェクト」主催の『日本気象行政史の研究——天気予報における官僚制と社会』合評会のコメンテーターとして参加した。私が日本近代の公衆浴場の歴史研究をしているため打診され、参加に至った。

本書を読んで初めて、気象学や気象行政（気象台という組織）があるとは理解していながらも、気象に関する知（認知）や天気予報というシステムがいかに私たちの生活から切り離せないものになっているか気づかされた。このことは天気予報という現在の私たちの生活にあまりにも密着したものがどのように成り立っているのか、またそれをその時々の人がどのように受容したのかという本書の関心にもつながっている。

本書は、「天気予報」を代表する気象をめぐる知と行政に関する歴史研究について著したものである。明治期の中央気象台の発足から戦後の気象庁の成立、そして現代の気象予報士制度の確立と、すなわち近現代日本において気象行政がどのように形成されていったのかを明らかにしようとしている。本書は「エキスパート・ジャッジメント」の制度化から「機械的客観性」への移行、「専門性」の成立をプロフェッションという観点に着目し気象行政の歴史を描き出そうとした研究として位置づけられる。

よく知られているように、気象をめぐる知の探究の歴史自体は古くからある。たとえばアリストテレスの気象論やルネサンスの気象論、デカルトの気象学などを思い浮かべる人もいるだろう。このように古くから気象というものに関心が払われてきたことを考えると、人間のはかり知りえないものとしての気象の仕組みを理解しようとすることや、さらには何かの予知としての天気を予報することに対する渴望やその意味づけの変容なども興味深い。

近年、気象の知をめぐる研究は、盛んであり、2016年には日本気象学会に気象学史研究連絡会が発足し、また堀之智『気象学と気象予報の発達史』（丸善出版，2018年）なども出版されている。「気象」とは気象学、科学史、

哲学、宗教学などに関わる学際的で広大なテーマでもある。本書はもちろんそのなかにも位置づけられるものである。ただし、あくまでも著者が強調するのは「気象行政」である。そういった点で、本書は行政学の研究であり、気象にかんする知を行政的にどのように運用していくかを検討したものだといえよう。

また、本書では軍と中央気象台とのコンフリクトや、天気予報の自由化などから、気象の「情報」をめぐる攻防が描かれており、気象がひとつの「情報」として大きな意味を持っていたことが析出されている。地球温暖化をめぐる問題が国際的に再び着目され議論されるようになった。日本では2018年の西日本豪雨や2019年の東日本台風による災害があったように、気象と防災とは切り離せない関係である。そういった点で本書は気象・気象行政というテーマの現代的意義の再考の一端を担う一冊でもある。

ただし、本書の文章表現や言葉の意味づけや使い方にはやや疑問の残る点も多かった。本書では、「価値」や「評判」という概念が頻繁に使われており、著者の分析の切り口になっているが、概念整理がより丁寧になされる必要があるのではないだろうか。この点については、合評会でも著者に質問したが、明確な答えが得られず残念であった。概念整理を進め、研究の進展により、さらに著者による研究書が出版され、より多くの人に読まれることを望みたい。

